



234号

2018 / 6 / 1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

〒195-0055 町田市三輪緑山2-18-19 寺西方

☎044-986-4195

<http://wanli-san.com/>

Eメール:t\_taizan@yahoo.co.jp



**麦の季節** 陝北黄土高原も6月は麦の収穫期である。刈り取った黄金色の麦の山は今年の生活を保障してくれる。しかし、口に入るまでにはしっかり乾燥させてから脱穀(実と茎を分ける)し、舂摺り(舂穀をとる)、製粉と作業が続く。

(2003年6月陝西省延安市川県土崗郷、撮影：周路)

今月のお話は、坐井观天(井戸の中から天を見る)、日本語では、「井の中の蛙、大海を知らず」として、よく使われる諺です。



古井戸に一匹の蛙が住み着いて、毎日井戸の底から、井戸の縁に囲われた丸い小さな青空を見上げて暮らしていました。

ある日、一羽の小鳥が飛んで来たので、蛙は小鳥に訊ねました。「あんたはどこから来たんだい？」小鳥が応えました。「僕は空を飛んでやって来たのさ。何百キロも飛んで来て、喉が渇いたので、飲み水を捜して降りて来たんですよ」蛙は言いました。「空は、あの井戸の縁の大きさしかないのに、あんたはそんな遠くから飛んでこられるわけがないだろう！」小鳥が言いました。「あんたは間違っているよ。空はとっても大きくて、限りが無いんだよ！」

蛙は笑いながら言いました。「私が間違っているなんてことはないよ。私は、毎日ここに座って空を眺めているんだ。目を上げればすぐに空が見えるんだぞ。間違えるはずがないじゃないか！」小鳥もまた、笑いながら言いました。「あんたはそんなとこに座ってないで、井戸の外に出てご覧よ。そして見渡せば、空がどんなに大きいか、すぐわかるから！」

言葉の説明：观=看。井戸の底に座って空を見る。視野が狭い、見識が低いことの喩え。

使用例：問題全体をよく見て、深く理解しなければならぬ。井の中の蛙であってはいけない。



これは、日本でも良く親しまれている諺ですから、中国でも古い話なのかと思いましたが、何と、唐代の詩人韓愈の話から出た言葉なのだそうです。韓愈も十分古いのですが、史記の成立年代からざっと700年は経っていますから、随分新しい出現のように感じます。中国の歴史を考える時、陥りやすい錯覚ですね。

蛙は日本人に親しみ易く、鳥獣戯画などにも頻りに登場します。この話で思い出したのは、小さい時に聴いた昔話です。京都の蛙が、大阪は賑やかだと言う話を聞いて、一度見てみたいと大阪に向かいました。その頃、大阪の蛙も、京都が日本の都で、とても立派だと聞いたので、見学に行ってみようと思い、京都に向けて旅立ちました。

二匹の蛙は、苦労しながら旅を続け、京都と大阪の境の峠でばったり出会いました。お互いの旅の目的を知ると、ここで背伸びをして眺めれば、街まで行かなくても様子が分かるだろうと相談して、お互いの身体を支え合

いながら、精一杯背伸びをして前方を見やりました。

京都の蛙が見たものは、お寺の塔がたくさんあり、広い通りが続く立派な街並みでした。大阪の蛙が見たものは、人や荷馬車が行き交う、活気に溢れた街の様子でした。二匹の蛙は、お互いに、「大阪は京都と同じようにお寺がたくさんある立派な街だ」、「京都も大阪と同じように活気がある大きな街だ」と思いました。二匹の蛙は、同じような街なら、態々苦労して旅を続けて、見に行く

必要はないと考えて、それぞれもと来た方向へ帰って行きました。

実際は、蛙が立ち上がると、目が後ろになるので、それぞれの蛙が見たものは、やって来た方向の、自分たちの街だったのです。日本の昔話としてこのお話を聴いたのは随分幼い時で、蛙が自分たちの眼の位置にも気が付かず、京都も大阪も同じだと考えたことが面白くて、記憶に残りました。

でも今考えれば、井の中の蛙が一念発起して、外の世界を見てやろうと旅には出たけれど、最後の最後は、やはり自分の殻を破って外の世界へ飛び出すことが出来なかったと言う寓意のこもった話だったのではないかなという気がしてきます。因みに、このお話の舞台は、西国街道山崎の天王山と言うことになっています。



Xiāng yuàn dé zhī zéi yě

## 郷原徳之賊也

きょうげん とく ぞく  
郷原は徳の賊なり〈陽貨第十七〉うえだ あつ お  
桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄

『論語』には後世、格言となった言葉が数多くあります。「四十にして惑わず」「一を聞いて十を知る」「信しんなくんば立たず」等のように、既に人口に膾炙はいしして、一度聞いただけで、だいたいの意味が分かるものもありますが、中には分かりにくいものもあります。表題の「郷原徳之賊也 (Xiāng yuàn dé zhī zéi yě) (郷原は徳とくの賊ぞくなり) もその一例と言ってよいでしょう。「郷原 xiāngyuàn」は「郷愿(郷愿)」とも書きます。郷きょうとは中国では地方の行政単位のことをいいます。示す領域の規模は時代によって異なりますが、この呼称は現在でも通用しています。日本でもかつて「郷」という呼称が使われたこともありますが、今風に言えば市町村に当たるのでしょうか。また郷里、故郷、望郷などのように、居住地や出身地を表わすこともあります。『論語』では居住地を示す「郷党」の二文字でしてしばしば出てきます。住み慣れた集団領域、くつろぎの場所、あるいはもう少し砕けて、仲間内という意味を持たせることもできます。

「愿」の字は、現在では「願」の簡体字として使われますが、本来は別字でした。愿げんには謹厳実直という意味があります。決して悪い意味ではありません。それが「郷愿」となる何故「徳の賊」となるのでしょうか。「賊ぞく」とは破壊者という意味です。

孔子より200年ばかり後に活躍した孟子は、この言葉に関する弟子万章ばんしょうの質問に対して次のように解説しています。

先ず質問の全文から見てみましょう。「一郷皆称原人焉。无所往而不为原人。孔子以为徳之賊，何哉？ (Yì xiāng jiē chēng yuàn rén yān, wú suǒ wǎng ér bù wéi yuàn rén. Kǒng zǐ yǐ wéi dé zhī zéi, hé zāi ?) (一郷皆原人と称す。往く所として原人

と為さざる無し。孔子以て徳の賊と為す、何ぞや) <『孟子』尽心下>。ここでいう原人とは善人のことです。仲間内ではみんなが善人だと言って褒めそやします。褒めない人などいません。でも孔子はそういう人のことを「徳の破壊者」だと言っています。何故でしょうか。

これに対して孟子が答えます。

「同乎流俗，合乎汚世，居之似忠信，行之似廉洁。众皆悦之，自以为是 (Tóng hū liú sú, hé hū wū shì, jū zhī sì zhōng xìn, xíng zhī sì lián jié. zhòng jiē yuè zhī, zì yǐ wéi shì) (流俗に同じ、汚世りゅうぞく どう おに合し、之に居ること忠信せい がっ これ おに似て、之を行うこと廉潔れんけつ しゅうみなこれ みずかに似たり。衆皆之を悦び、自ら以て是と為す)。低俗に流れ、汚濁の世にまみれているのに、日常生活では、如何にも信義に厚く、公務に就けば清廉潔白に見える。仲間内ではやたらと受けが良く、自らもそれを良しとしている。郷原とはそういうものである、と。

この意味からすれば、外面はもっともらしく見えるが、実際は汚れた世の中を、ずる賢く立ち回って、うまく生き延びる偽善者、似非君子ということになります。

孟子は、さらに「孔子曰：恶似而非者 (Kǒng zǐ yuē : wù sì ér fēi zě) (孔子曰く、似て非なる者を恶む) <同上>」ともいっています。しかし今の『論語』にこの言葉はありません。『孟子』に至って初めて出てきます。もしかして当時の『論語』テキストにはこういう言葉があったのかもしれない。

それはともかく、「郷原」=「似て非なる者」、今の世にも多すぎると思いませんか。

(わりりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

## 四川の旅(4) 李庄古鎮から五粮液工場、そして竹海へ 寺西 俊英

2017年10月22日の朝が来た。四川に来てから4日目である。今日は宜宾市にある「李庄古鎮」と「五粮液工場」に行くことになっている。今日も天気がすっきりせず時折小雨が降るのでホテルで傘を借りた。また押金を200元払った。傘を返せばお金は戻してくれるが、お客を信用していないのだ。傘には「凱爾頓豪庭酒店」とホテルの名前が入っているのに、こんなものを誰が盗むか!と言いたくなる。

李庄古鎮は宜宾市中心部から東に19キロメートルの所にある。2005年に国家級歴史文化名鎮に指定され、2008年に国家AAAA級旅游景区に指定されており、肩書は立派である。また「万里長江第一古鎮」の称号まで頂いている。何でも「第一」や「最大」の好きなお国柄だけある。

さてタクシーで古鎮の入口に着いた。傘を差しながら幅の広いダラダラ坂を下っていくと正面に長江が見えてくる。前号に書いたように宜宾市中心部から

長江は始まるので、この場所は起点から19キロメートル下流にある。長江を見るのは、2008年に社員旅行で見た江蘇省の鎮江が最初だが、岷江と違ってここもゆったり流れている。右手に川に沿って道が続いているが、街を紹介する説明板が立っておりそれを見ると古鎮の歴史が書かれている。説明板には1470年の歴史がある、と書かれている。さらに読み続けると、「梁代大同6年(公元540年)に南廣県と六同郡を設置した」とある。梁と言う国は、南北朝時代の南朝側の国で、502年から557年と短命の国で、その後は「陳」に代わっている。そして589年に「隋」に全国統一されている。いずれにしてもこの辺りは6世紀には歴史に残っているわけである。日本は第29代欽明天皇の御代である。蘇我氏と物部氏が対立していたころだ。

近代に到って第二次世界大戦時には、抗日拠点となり上海で有名な「同済大学」、南京の「金陵大学」また中央博物院など多くの施設が戦火を避けてこの地に移っている。当時の李庄は多くの学生で活気に溢れていたのであろう。川沿いの道を進むとすぐに同済大学が入っていた建物があり、その旨が書かれている。

そぞろ歩いていると、強烈な匂いが襲ってくる。

何かと思えば白酒を作っている。この建物は昔ながらの製法で製造しているらしく、いくつもの竹で編んだ丸い籠に高粱や小麦が入れている。何を蒸しているのか分からないがあちこち蒸気が出ていた。ここで白酒のお土産をいくつか購入した。友人に教えてもらったが、李庄は昔から「三白」で有名なのだそうだ。その一つが「白酒」なのだ。午後は「五粮液」の大工場に見学に行くが、このような市井の家内工業的な製造所もあちこちにあるのである



「酒聖山」から臨む五粮液大工場。遠くに名物のボトルが見える。

う。あと二つは、「白肉」と「白糕」である。「白肉」とは、茹でてある豚肉を大きな長方形の包丁で薄切りにしたものである。これを唐辛子のタレにつけて食べる。厚さは2ミリくらいであるがうまく切れるようになるには2～3年の修業が必要だそうだ。午前11時をまわっていたので白肉料理を食べに行くことにした。友人は事前に調べていたようで、「映秋飯店」というお店に案内してくれた。肉の好きな私だが白肉は本当にさっぱりして美味しかった。ここを出てすこし歩くと玉仏寺(天上宮)があり中に入ってみた。なかなか立派な寺である。ちなみに李庄一帯は古い街だけあって、奎星閣、禹王宮、南華宮などこの地方では名の通った寺院がいくつもある。

次の予定があるので、先程の店で聞いたバスセンターの方向に歩く。すると「白糕」のお店の前に来た。



「竹海」の入場門。周囲はすべて竹林。

試食させてくれるので食べてみたが如何にも中国風なお菓子である。美味しそうなのでお土産も含めてたくさん購入した。ここでバスセンターの場所を聞くとまだかなりあると言う。時間を無駄にしたくないのでタクシーで「五粮液」工場に向かった。15分くらい乗ったであろうか、目的地に到着した。タクシーを下車して奥の方に歩いて行く。倉庫なのか工場なのか分からないが大きな建物がいくつも連なっている。工場の中に入って見てみたかったが丁度工事をしている養生の壁が続くのでそのそばを通り過ぎるだけである。もっとも中に入れたとしても先ほどの鼻を刺す匂いが充満していると思われるので、どうしても見たいわけではない。そのうちに金属製のライオンと銀色に光る女神(?)の像の所に来た。どちらもなかなかの像である。像の両側から階段が小山の上に伸びている。傍らにある看板には、この山を「酒聖山」というと書かれている。そして説明板には次のように書かれていた。「酒聖山、是十里酒城制高点。海拔320米、山上有一觀景台及造型彫塑」つまり酒聖山は、〈海拔320メートルでこのあたりで最高地点である。山の上には展望台とモニュメントがある〉のである。「制高点」は辞書では、軍事上重要な高地や建築物とも出ているがここでは単なる最高地点としておこう。階段を数十段上ると目指す頂上とは反対側の遠くに、市の観光案内のパンフレットにある有名な巨大な白酒のボトルのモニュメントが見えて来る。このボトルを見ると、ようやく宜宾市まで来たんだなと何だか嬉しくなる。さらに上るとボトルは少し小さくなって逆に工場の宏大な全景が望まれる。頂上には子供が喜びそうなモニュメントがいくつか置かれてあり、少し

離れたところに白亜の大きなもう一つの女神像が天を衝くように立っていた。

すこし霏がかかっていたが周囲に高い山がないため海拔320メートルからの見晴らしは素晴らしくしばらく眺めていた。降りるときは白酒のボトルを見ながら一步一步かみしめる様を下山した。日本では、お酒の製造工場では試飲する建物があるがここでは残念ながら見当たらなかった。

工場の入口に着き、15時近くになったのでタクシーでまずホテルに向かい傘を返し荷物を受け取ってから、「竹海」に向かうことにした。ホテルで押金200元を返してもらってホテルに別れを告げた。友人が運転手と話をし竹海まで150元で交渉が成立した。途中高速道路に乗ったりしてようやく竹海の入場券を売る旅行センター前に着いた。入場券を買いに行こうとすると、友人とタクシー運転手が話しているが何か折り合いがつかない様子である。聞くと高速に乗ったりしたので200元欲しいと言うことである。私が中に入って「150元で約束したのだからそれ以上は払わない」と強く言うとあきらめて走り去って行った。

入場券売り場に行って、友人に私のも買うように頼むとしばらくして戻り3人で220元だった、と言う。3で割り切れないので理由を聞くと、70歳以上は無料だとのこと。つまり入場券は一人110元(日本円で約1700円)である。儲かった気分であるが70歳以上無料の観光地は初めてである。ホテルからの迎えの車が来るまで周囲の景色に見入っていた。見渡す限り竹、竹、竹である。ここからいくつかの小山が見渡せるがすべて竹で覆われて今まで見たことのない光景である。あとで運転手からの話で「この辺りは、パンダはいない」ことが分かったが、やはり四川省はパンダの郷だと実感した。マイクロバスは竹林を縫うように走り、夕方6時頃「思楠・竹園酒店」ホテルに無事着いた。まだ行ったことは無いが富士山の樹海のようなイメージで、今居る場所はどのあたりか全く分からない。ホテルは山小屋風の造りで周囲に溶け込んだ佇まいである。山の中腹ということもあり流石に寒さが厳しく、各部屋は暖房で暖かくしていた。

(続く)

## ➤ 王仁三郎と鎮魂帰神

三島由紀夫に『英霊の聲』という小説があります。

この小説は二二六事件の首謀者の霊が、「帰神の会」で呼び出され、人間宣言した天皇を「などとすめろぎは人間となりたましい」と何度も何度も執拗に呪詛する内容です。この小説の最後に三島が参考文献として挙げた一つが、王仁三郎の下にいた友清歆真の『靈学筌蹄』という書です。帰神の方法は大本の鎮魂帰神法から取ったものでした。

友清は1921(大正10)年の第一次大本事件が起こる前、大本にいて王仁三郎の鎮魂帰神法を学びました。当時、大本教団では盛んに鎮魂帰神を行い、病を治したり、また呼び出される霊に関心を持つ人たちが大本にやってきました。

その一人に浅野和三郎がいます。浅野は東京帝国大学英文科在学中に小泉八雲に学び、卒業後は横須賀の海軍機関学校の英語教官を務め、また英文学者として著名でした。

浅野は子どもの病が祈祷師によって治ったのを見て、この種の現象に非常に関心を持ち、大本に引きつけられ、1916年(大正5)4月に綾部にやってきて王仁三郎に会いました。そして、当時81歳になる出口なおに会い、「自分は生来初めて現実の穢土に清らかさ、麗しさ、気高さの権化ともいひつべき肉体を見た、と思うた。生来未だかつて心の底の底から真に恭敬の念慮をもって、首を下げたことの経験のない自分が、大本教祖により初めて《敬服》といふ言葉の真味を体験せしめられた」と書いています。

浅野はその後、一家で綾部に移住しました。植芝盛平(合気道創始者/‘わんりい’233号参照)といい浅野和三郎といい、それなりの傑物たちが王仁三郎というカリスマの魅力に引かれて綾部にやってきたのでした。

その浅野和三郎や谷口雅春(生長の家・創始者/‘わ

んりい’5月号参照)らは第一次大本事件後、大本を離れて独自の活動を始めました。

## ➤ 秘かに反戦の意思を伝える王仁三郎

王仁三郎は保釈(責付出獄)中の身で、本来なら国外に出ることなど禁じられていましたが、植芝ら側近を5人ほど連れて秘かにモンゴルに出かけました。王仁三郎はモンゴルを経由して最終的にはエルサレムを目指していたようです。

「東亜の天地を精神的に統一し、次に世界を統一する心算なり、事の成否は天の時なり、煩慮を要せず、王仁三十年の夢今や正に醒めんとす」

と詠った王仁三郎でした。満蒙の地は張作霖や、彼の支援を受けたモンゴル革命軍など複雑な争いの地でもあり、遂に内モンゴルと満州との境界の町パイントラで張作霖に捕まりました。銃殺されようとする段階で日本領事館が介入し保釈され、王仁三郎は熱狂的な信者に凱旋將軍のように迎えられ日本に戻ってきました。しかしその後、1935(昭和10)年の第二次大本事件では徹底的に弾圧され、王仁三郎も島根県の松江で逮捕され、6年8か月もの間、獄中生活を強いられました。しかし1942(昭和17)年7月、大阪控訴院での第二審判決では治安維持法違反については証拠がないとして無罪、また不敬罪でも無罪となり、王仁三郎と夫人のすみ子も保釈されました。

王仁三郎に平穏な生活が戻ってきましたが、訪れる信者の中には前線に向かう兵士たちがいました。王仁三郎はそんな彼らに、鉄砲は空に向けて撃てと助言しました。敵兵を殺さないためです。また、「我敵大勝利」と読める守りを持たせています。

四代教主になる孫の出口直美の婿にと熱心に出口家入りを望まれた栄二が出征する時、王仁三郎に「お国のために尽くします」というような言葉を発したところ、「この戦いは悪魔と悪魔の戦いじ

第24回 「本当の世界平和」を願った王仁三郎

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おおるい よしひろ)

混迷の時代を拓くザメンホフの人類主義「私は人類の一員だ！」

や。必ず帰ってこい」と言い、事実、栄二は医者から帰郷するようと言われました。柔道も嗜み、頑健な栄二でしたが、身体検査で医者から「体がおかしいから帰郷せよ」と強く言われたのでした。もしかしたらカリスマ的な王仁三郎の霊力がそうさせたのかもしれませんが。

### ➤ 国家賠償請求の放棄

1945年8月、日本はアジア太平洋戦争に敗北しました。しかし支配権力は国体護持や不敬罪を諦めようとはしませんでした。しかしGHQは10月4日、明治・大正・昭和に亘って民衆を抑圧してきた「思想・信教・集会・言論の自由に対する制限を確立または維持」する法令・制度の撤廃を指令しました。治安維持法なども廃止され、10日には国事犯、政治犯も釈放されました。天皇の名前で有罪とされた大本不敬事件も無に帰しました。

第二次大本事件の弁護士たちは合議の上、無謀な弾圧と長期拘留に対して、政府に対して補償を求めようように決めました。その打ち合わせは亀岡の中矢田農園にある王仁三郎たちが住む家で行われました。たまたま会議中の部屋の前を通りかかった王仁三郎はその補償のことを聞き、補償の請求をするなと言いました。王仁三郎はこう言ったのです。

「今度の事件のお蔭で大本は戦争に関与できない境遇におかれ、人類の平和に対する発言権を与えられた。これはまったく神の恩寵である。今度の事件は神様の摂理でわしはありがたいと思っている。賠償を求めて、敗戦後生活に苦しんでいる国民の膏血こうけつをしぼるようなことをしてはならない」

弁護団はすでに賠償請求額も検討していましたが、この王仁三郎の考えを知った清瀬一郎ら弁護士たちは「これが本当の宗教家だ」と感激し即座に補償の請求を取りやめました。

### ➤ 「吉岡発言」で世界平和を発信

長い獄中生活は王仁三郎の身体を弱めました。しかし作陶に力を注ぎ、数々の耀碗を創りあげましたが、実は夫人のすみ子によれば「聖師はんは、本当は彫刻がしたかったんや。未決から帰ってすぐその準備をされたが、聖師はんの体が弱っていても

だめだと止めさしたんや。今となって、先生の好きなこと何でもさしてあげたらよかったのになあと思う」と、王仁三郎が亡くなった後、述懐したと言います（出口栄二著『大本教事件』）。

こう見てくると王仁三郎という人間は大彫刻家になっていたのかもしれませんが。ともあれ無尽蔵ともいえるその芸術的なエネルギーは書画、映画、演劇などの創作活動にも表れています。

1945年12月8日、大本事件解決報告祭が綾部で開かれ、全国から1500人ほどの信者が集まりました。交通がまだ整備されていない中、いわば口コミで信者たちがはせ参じたのです。その二日後、王仁三郎は鳥取の吉岡温泉に清遊しました。その吉岡温泉に滞在中、大阪朝日新聞の記者が訪ねて来ました。この時の王仁三郎の談話は、12月30日付の朝日新聞に、「予言的中“火の雨が降るぞよ” 一新しい神道を説く出口王仁三郎翁」という見出しで掲載されました。その談話を紹介してこの項を終えましょう。

「自分は支那事変前から第二次世界大戦の終るまで囚われの身となり、綾部の本部をはじめ全国四千にのぼった教会を全部たたき壊されてしまった。しかし信徒は教義を信じつづけて来たので、すでに大本教は再建せずして再建されている。・・・自分はただ全宇宙の統一和平を願ふばかりだ。日本の今日あることはすでに幾回も予言したが、そのため弾圧をうけた。“火の雨が降るぞよ”のお告げも実際となって日本は敗けた。これからは神道の考え方が変わってくるだろう。国教としての神道がやかましくいわれているが、これは今までの解釈が間違っていたもので、民主主義でも神に変わりがあるわけではない。ただ本当の存在を忘れ、自分の都合のよい神社を偶像化して、これを無理に崇拜させたことが、日本を誤らせた。（中略）いま、日本は軍備はすっかりなくなったが、これは世界平和の先駆者としての尊い使命が含まれている。本当の世界平和は、全世界の軍備が撤廃したときにはじめて実現され、いまその時代が近づきつつある」

この王仁三郎の予言は未だ実現しておりません。

## 東西文明の比較 (25)

▼海を渡った人々▲

陽光新聞社・顧問

塩澤宏宣

### 🏛️ 選び抜かれた人物

遣唐使のメンバーは、大別して「使節」「船員」「随員」「留学生」になります。

「使節」は、大使以下、録事(書記官)に至る四等官、従者などの、いわゆる外交使節の本体です。日本を代表する立場ですから、それにふさわしい人物が選ばれました。家柄、学識教養、風采など、総合的な選考がなされました。

第1期の大使では、犬上・吉士・高向などといった渡来系氏族の出身者が多かったようです。この時期の遣唐使は、外交・留学などで知識が豊富な実務優先者が選ばれていま

した。それが、2期以降になると、栗田・多治比・大友・中臣・藤原・石上・石川・平群・佐伯などのヤマト朝廷以来の名族から選ばれました。

この違いは、日本の文明化の進展に関係しています。遣隋使時代を含め、早い時期には外交に長けた「専門氏族」に頼っていましたが、次第に中央の大氏族にも中国的な教養が行きわたり、遣唐使節にふさわしい人物が出てきたのでしょう。

### 🏛️ 公・私の通訳

使節の中でも重要な人たちがいました。通訳(通事・訳語)です。これらには、中国語をはじめ、新羅語、奄美語の使い手がいました。新羅や奄美(南西諸島から沖縄を含む)は、それらに漂着した時を想定していたのです。彼らの手当は、先に述べた録事などの四等官に匹敵していました。それだけ通訳が重視されていたのです。彼らは、公人として使節の正式な通訳ですから私的な通訳ではありません。

留学僧の最澄は、「自分は中国語に習熟していない。訳語(通訳)は使節用だから使えないので弟子の義真を帯同したい」と申し出ています。有力者は私的な通訳を同行させることも出来たのです。

### 🏛️ 遣唐使船を操る船員たち

次に重要なのが船員です。知乗船事は、各船の船内を統括する「船長」です。承和の遣唐使(836年:第19次)では、4名の知乗船事がいました。手当は、やはり四等官に匹敵していましたから、重要な位置づけだったのでしょう。次に船師、操舵の責任者。現代では「機関長」です。舵取り、操舵手を通じて水手を指揮しました。彼らは皆、公民から採用されましたが、なかにはその活躍ぶりから、正史に名を残す人物がいました。第12次遣唐使船の舵取り、川部酒麻呂です。彼は第4船の舵取りでしたが、船尾から起きた火災の時、火傷を負っても舵を離さなかったということで、帰国後、その手柄によって従七位下に任じられ、肥前国松浦郡の役人に取り立てられました。

遣唐使として出かけた者は、帰還すると、全ての税負担を3年間免除するという決まりでした。時によっては、10年間の免除とか、同居する家族にまで免除の範囲が拡大された例もありました。危険を冒しても船員になりたいという若者が多かったようです。

### 🏛️ 技術研修生が広い分野へ

一種の留学生です。学ばべき分野を決め、それを習得すれば帰国するという「短期留学」です。ガラスや釉薬を学ぶ「玉生」、鍛金技術を学ぶ「鍛生」、鑄金技術を学ぶ「鑄生」、木竹工を学ぶ「細工生」、薬や香料を学ぶ「薬生」などなど。一風変わったところでは、舞いを学んだ「舞生」などもあったようです。「生」は、技術などを学ぶ生徒の意味です。

### 🏛️ 最澄と空海

「我が日本国の延暦年中、叡山本師(最澄)入唐の時、空海阿闍梨、元薬生はじめ為り。同じく共に入唐し、慧果阿闍梨に遇いて灌頂<sup>1)</sup>を蒙る。則ち本師は先に還り、平城の北野に始めて灌頂を行えり」

この一文は、9世紀後半に活躍した天台宗の僧、安然が記した「真言宗教時義」の一節です。この文によると最澄と空海が同じ遣唐使で渡海<sup>2)</sup>し、同時に密教を学んだことにふれています。注目されるのは、空海が「元め薬生為り」とあることです。

太政官符によれば、空海は延暦二十二年四月七日に出家したとあります。これは1回目の遣唐使船が出発する直前のことになります。この時、空海は31才でした。つまり空海は、最初の任命時点では、まだ正式な僧ではなかったのです。おそらく空海は、それでも入唐したい一心で、薬生になる道を選んだのではないのでしょうか。

もともと大学寮出身の空海は、20代から仏教以外の学問に造詣が深く、道教にも通じていました。道教は医術や博物学とも関係があり、薬の知識は必須です。そうした知識は、青年期の著作「**聾瞽指帰**」や晩年の作「**秘密曼荼羅十住心論**」にも見事に生かされています。空海は、持ち前の語学力を生かして、密教の完全な伝授を受けると、帰国する遣唐使船で早々に帰国してしまいます。日本で布教する機会を一刻も早く確保したかったのでしょう。横道にそれますが…唐の高僧、慧果(恵果)は、仏教(密教)は唐では育たないとみて、異国から来た空海に、その全てを伝授したそうです。その心は鑑真と同じかもしれせん。

### 阿倍仲麻呂と吉備真備

遣唐使の使命は、日中の外交にあったことは事実ですが、真の使命は長期・短期の留学であったことは間違いありません。日本の場合、国内統治のために中国王朝の権威を借りる必要がなく、外国勢力に脅かされる事がなく、外交努力はそれほど重視されませんでした。

留学者とといえば、まず阿倍仲麻呂と吉備真備を挙げるべきです。この二人は、同じ第7次・養老元年(717)の遣唐使で入唐しましたが、出自は全く異なりました。仲麻呂は当時16才、正五位下の舟守を父に持つ中央の名族の出身ですが、真備は23才、祖父・父共に五位にも達していない岡山豪族の出身でした。

仲麻呂は入唐後、唐の大学に入学、しかも科挙に合格して左春坊司經局の校書(皇太子付きの書物校正係)に任じられました。この職は、貴族の子弟が任官を希望する清官(格式は高いが実務の少ない官職)です。仲麻呂は、玄宗皇帝の愛顧を受けて順調

に昇進を重ね、皇帝に近侍する左補闕(ほけつ)にまで昇進しました。しかし天平勝宝の遣唐使が帰国する時、願い出て帰国を許されましたが、船が遭難してベトナムに漂着して帰国は実現しませんでした。唐に戻り、やがて昇進して安南節度使となり、770年在唐のまま亡くなりました。日本人には珍しい「唐の官人」となった人です。

一方、真備は入唐後、<sup>こうろし</sup>鴻廬寺で四門学の助教、趙玄黙から出張講義を受け、在唐は16年に及びました。唐朝から受けていた手当は、全て書物に換えて持ち帰ったといひます。帰朝後献上された漢籍は、儒教でいう中国学の全分野、「礼・楽・射・御・書・数」にまたがっています。彼自身、百科全書的な知識をマスターし、基本となる漢籍をもたらしたということでしょう。真備も天平勝宝の遣唐使に従って帰国しました。帰国後すぐに正六位下に叙せられ、大学寮の助(次官)や東宮学士に任じられました。特に東宮学士になって孝謙天皇の教育に関わり、正二位・右大臣にまで上り詰めました。

### 留学僧たち

8～9世紀までの僧侶は、基本的に官吏の側面を持っていました。出家、得度には国家の厳しいチェックがありましたが、一旦認められれば税の免除があり、その行政能力や修行の程度に応じて、役職や位階が与えられました。僧侶の出身母体は、中下級官人、中小氏族、渡来系氏族が多かったようです。留学僧は、帰国して自分の履歴に花を添えようと考えていました。

長期留学僧の中で、大きな足跡を残した道昭・道慈・玄昉・円仁といった人々は、皆このタイプです。道昭は、河内を本拠とした渡来人。第2次の使節(653)で入唐し、当時インドから帰って活躍していた玄奘三蔵に師事し、多量の経典を持ち帰りました。

道慈は、法隆寺近傍の中小豪族の額田部氏の出身。大宝の遣唐使(702)で渡唐し、16年にわたる留学を終え、養老の遣唐使(717)で帰国。その見識は広く、奈良時代に護国経典として尊重された「金光明最勝王経」は、中国訳されたばかりの段階で、彼がいち早く持ち帰ったといわれます。日本の

仏教界の刷新にも貢献しました。

玄昉は、道慈と同じく、下級官人を多くだした阿刀氏の出身。仲麻呂や真備と共に養老の遣唐使で渡唐、玄宗皇帝の愛顧を受けました。帰国に際して5046巻もの経典をもたらし、後の写経事業に貢献しました。帰国直後に一躍にして僧正に任ぜられました。聖武天皇の国分寺建立構想は、玄昉の着想と言われます。

円仁もまた、下野国の豪族出身です。最澄について天台宗を学びました。承和の遣唐使(838)で入

唐。10年にわたる在唐の後帰国、最澄や空海が持ち帰らなかった経典を集め、日本密教の発展に貢献しました。その紀行文「入唐求法巡礼行記」は、日唐交流史として、また唐の歴史を知る上でも高く評価されています。

### ■注

- 1) 灌頂(かんじょう): 頭頂に水を灌いで諸仏や曼荼羅と縁を結び、正しくは種々の戒律や資格を授けて正統な継承者とするための儀式のこと。
- 2) 同じ遣唐使で渡海: 延暦二十二年(803)に出発したが、悪天候で一旦渡海を断念、翌年に再出発した。

## 中国の笑い話 36 (「365夜笑話」より)

翻訳: 有為楠君代

### ■第122話: お母さんを見倣う

ある日、お母さんは小明の宿題帳を調べていて、作文の宿題を見つけました。作文の題は、「僕のお母さん」なので、どんなことが書いてあるのか読んでみました。「僕のお母さんは、身の丈8尺、虎や熊のように逞しく、赤銅色の四角い顔です。口から血が滴るようで、その声は雷のようです」と書いてあります。

お母さん「まあ、どうしてお母さんはこんな風なの?」

小 明「お母さんを見倣っただけだよ!」

お母さん「お母さんを見倣った、ですって?」

小 明「お母さんは、文章を書く時、いつも新聞を丸写しするでしょ?」

### ■第123話: 若し億万長者だったら……

作文の時間、先生が「もし私が億万長者だったら」と言う題で作文を書かせた。生徒は皆、いろいろ楽しいことを考えながら作文に取り組んでいたが、フランツはじっと座っているだけだった。先生は不思議に思って訊いた。

先 生「フランツ、何故作文を書かないんだね?」

フランツ「僕は知っています。億万長者は作文なんて書きませんよ!」

### ■第124話: 飲むと読む

パットが文学の授業に出ると、先生は皆に文章を書くよう要求したので机の前で長いこと考えこんでいた。

ワシリ「額に皺を寄せて、何をしているんだい?」

パット「『私は昨日何をしたか』と言う題で、文章を書かなくてはいけないんだ」

ワシリ「君は昨日何をしたんだい?」

パット「何も珍しいことはしていない。酒を飲んだだけ。書くことなど思いつかないよ。」

ワシリ「飲んだことは分かっているんだから、『酒を

飲む』を『本を読む』に変えれば良いんだよ」

パットは文章を書き始めた。

「私は朝起きて、本を半分読んだ(中国語では、「一冊」は「一本」と表す)。いろいろ考えた後で、残りの半分(半本)を一気に読んだ。しかし、もっと読みたかったので、店に行って、もう一冊(本)買った。帰り道でワリシにあったが、その眼を見て、彼も少なからず本を読んでいたのが分かった」

### ■第125話: トミーの作文

先生が子供たちに、「僕の犬」と言う題で、150字以上の作文を書かせました。トミーは暫く考えていましたが、書き始めました。

「僕は犬を一匹飼っています。名前はパピーです。僕はパピーが好きです。全身真っ黒で、頭のてっぺんに少し白い毛があります」ここまで書いて、トミーは字を数えましたが足りません。少し考えて、続けて書きました。「僕は毎日パピーと散歩をします。パピーは散歩が大好きです。僕も好きです。でも雨が降ったら行きません。僕はパピーをお風呂に入れます。パピーはお風呂が大好きです。僕もパピーをお風呂に入れるのが好きです…」これでもまだ足りません。

考えているうちに、良いことを思いついてにっこりしました。それから猛然と書き始めました。「僕はパピーが近くに来るようにと呼びました。パピー。でもパピーは来ません。又呼びました。パピー、まだ来ません。僕はパピーの名前を呼び続けました。パピー、パピー、パピー。何回呼んでも来ませんでした。これで数えてみるとあと2文字足りませんでした。パピーは落ち着いて、もう一度パピーと書き足して、自分の名前を書いてから、作文を提出して、悠々と教室を出て行きました。」



# 樹木・花にまつわる物語

## 第5回 ネムノキ 合歡の木

河本義宣

『象瀉<sup>きさかた</sup>や雨に西施<sup>せいし</sup>がねぶの花』

芭蕉の「奥の細道」に出てくる一句です。“西施”って、何？ 誰？

その前にネムノキについて。江戸時代ネムの発音はネブと呼んでいたようです。マメ科の落葉高木で、原産地は日本、南アジアです。名前の由来は和名のネム、ネブは、夜になると葉が閉じること（就眠運動）に由来します。漢字名の「合歡木」は、中国でネムノキが夫婦円満の象徴とされていること



ネムノキ(Wikipediaから)

ことから付けられました。学名は *Albizia julibrissin* Durazz. (1772)。ヨーロッパにネムノキを紹介したイタリアの自然科学者 Albizzi への献名でしたが、命名者の Antonio Durazzini (18世紀のイタリアの植物学者) が、*Albizzia* とすべきところを *z* を1つ書き落として *Albizia* になったというエピソードが残っています。

話を西施に戻します。

「西施」は中国の歴史で紀元前500年ごろの、呉と越の抗争に登場する女性で、後世、中国四大美女と言われた一人です。江南の地、越の国西施村の村娘でしたが、若いころより美しいことで村中の評判でした。体が弱く、眉間にしわを寄せ、首を少し傾けて歩いていました。それがまた美しいと言うことで評判になりました。醜女<sup>しこめ</sup>の女性が美人に見られたいと西施の真似をして歩いたという故事から、「顰<sup>ひそみ</sup>に<sup>なら</sup>倣う」という成句が出来たといわれています。

さて、呉越抗争の発端は国境を接する村の稲作時の水田の水引きのトラブルです。これまでの約束を破って勝手な振る舞いをしたので、相手方が役場に訴えます。埒が明かず、互いにお上に訴えました。解決せず遂に両国の戦争へと発展したのだそうです。

両国の戦いは勝ったり負けたりして何年間も続き、「臥薪嘗胆」の成語を生んだのはご存じのとおりです。

呉王・夫差<sup>ふさ</sup>が勝って越王・勾踐<sup>こうせん</sup>が捕えられて危うく殺されそうになった時、越国は呉国に服従を誓い、勾踐は命拾いをします。が、越国の重臣・范蠡<sup>はんらい</sup>は更に策を練って、件<sup>くだん</sup>の西施村の美女・西施に、「夫差に限りなく贅沢をさせて、呉の国力を削ぐよう計らってほしい」と密命を与え夫差に送りました。夫差は西施を迎えて、華美な暮らしに溺れ、その一方で覇者にならんとし、中原への度重なる

遠征軍を派遣したため国力が次第に消耗して行きました。苦節10年、越国は呉国に挑みます。范蠡は出兵に当たって部下に「如何なることがあっても西施を元気な姿でわしのところに連れてくるように」と厳命します。怒涛のごとく呉軍を襲った越軍は呉王・夫差<sup>ふさ</sup>を姑蘇山<sup>こそざん</sup>に追い詰め呉国は滅びました。

部下に伴われて范蠡の前に現れた西施は「これで良かったのですね」と一言、范蠡もまた西施に深くと頭をさげたとされています。范蠡は「飛鳥尽きて良弓蔵る」(用がなくなれば捨てられることのとえ)の言葉を残して、西施を伴って齊の国に行き、鴟夷子皮<sup>いしひ</sup>と名乗って商売をし、数年を経ずして、巨万の富を築いたと伝わっています。



町田市薬師池公園にて。濡れると垂れる。(2015年筆者撮影)

## 海外出張の思い出 (旧ソ連・ノボロシースク編 ⑤)

高島 敬明

最高責任者であるエンジニアリング会社のYプロジェクトマネージャー(プロマネ)は、統率力があり仕事に精通しているだけでなく、日本人には珍しくお酒が並外れて強い人でした。私もパーティーに時々出ることがありましたが、ソ連の宴会は初めからウォッカでの乾杯になります。

延々と「ウラー」(万歳の意)が続くわけですが、注がれたウォッカは必ず飲み干さねばなりません。中国でも白酒を「乾杯乾杯」と言いながら飲み干す習慣があるようですがそれと同じです。

また、習慣でしょうが必ず乾杯の音頭を取る人から、たわいのない「小話」が話され、それが終わると「ウラー」となるわけです。ある小話を通訳が訳すには例えば次のような話です。〈ある村に遠洋航海に出ている船員の綺麗な奥さんがいました。どんどん太って参りました。ある日病院に行きました。すると、スマートな奥様になって帰ってきました。この奥さんに乾杯しましょう〉となるのです。要は出産して退院したということですがどのような事情があったのかはみなさん想像してください。お返しに日本人も小話を返すのです

が、少し面白い話の方が好まれるのでプロマネは、桃太郎の一節を話したりしましたがとにかく苦勞されていました。

このような飲み会が続くのですが、わがYプロマネは食べるものが少ない中、最後まで乱れませんでした。Yプロマネの話では、フランスのプロマネはお酒が弱いらしく海運省の係官はこのプロマネはだめだ、だめだと話すばかりで要求事にもなかなかサインをしなかったとのことでした。

お酒の話のついでですが、お酒の好きなソ連人はアルコール中毒が多くなり、フルシチョフ首相(1894～1971年)になってからウォッカは、100g、200gと量り売りになりました。我々は食堂でウォッカを瓶で購入できましたのでよく頼まれました。「息子が大学から帰ってくるので、ガスバージン高島(高島様の意味)!ウォッカを瓶で買ってもらえないか」とか「大きいハムソーセージを〇〇キログラム買って欲しい」という具合に。

さて、こちらに来て1か月くらい経ち、5月に入りました。1日はメーデーなので休日ですが、仕事の段取り次第では出勤もありうると思っていました。幸いまだ本格的に忙しくなる前でしたので休みとなり、全員でバスに乗って町の中央のメーデー広場に行きました。

バスはブルガリア製で立派で綺麗でした。広場には第二次世界大戦の戦車とか魚雷艇が7～8メートル位の高さの台に飾ってあり、そのあたりをただみんなて歩くだけのお祭りでした。人々は手にバラの花を持ち、小綺麗な服を着ての行進です。屋台も出ておらず、ただぶらぶらするだけでしたが本当に皆さん楽しそうでした。バラの花は、兵士が直立不動で警護している何の記念碑か分か



現場の監督の写真。左から計装の監督、中央がサブマネNo.2、右が筆者。



フランスの会社「Uie社」の作業員の宿舎兼機材運搬用台船。3隻ほど見かけた。(1978. 5)



据付(鳶たち)の主力メンバー。(1978. 7)

りませんが、その前に添えるのです。

メーデーも終わり少し経った頃、栈橋工事が一部完了したのでフランス側から我々に引き渡しがありました。人間関係はできていましたので比較的スムーズにいきましたが、引き渡しの会議は大変でした。例によってロシア語、フランス語、英語、日本語と話されていきますので時間がかかります。またこちらから返すのですが、またしばらくかかると言った具合です。

引き渡しがようやく終了し、数字を確認しながらお互いに立会いの下で測量に入りました。送油管の底の部分の部分を起点とし、順次高さを決めていくのですが、日本から持って行った測量機器が珍しいのか人だかりができて仕事になりません。ソ連に置いていくつもりで持参したトランシット(角

度)とレベル(高さ)の測量機器、墨ツボ、墨の付いた糸でピンとはねて地面に直線を引く昔ながらの道具、曲尺等々、これらが非常に珍しかったようでした。

そこは、現場事務所から見るところなので、見兼ねて女性の通訳が飛んできましたが、華奢で上品な通訳が「そこをどいてください」と話しても作業員たちはいなくなるどころか逆に増えていく始末。やはり男の現場には上品な女性通訳では埒が明かないことが分かりました。Yプロマネも頭を抱えてしまいました。今さら日本から男の通訳を呼べるすべもなく、プロマネは私に「だめでもともと、ソ連の海運省に通訳のお願いをすることにします」と話されました。

ソ連側の通訳では内部情報が漏れることを心配し我慢していたのですが、背に腹は替えられなくなってしまいました。これまでは海運省側から現場に指示が来たときは、港湾の専属電話で事務所に電話して女性通訳に「何と指示しているか聞いてくれ」と依頼すると、ソ連人に電話を替わって聞いてもらい、通訳から「〇〇と言っているそうです」と返事をもらいながら、細々と測量を続けていました。一事が万事こんな調子でした。

一週間くらい経ってから「高島さん、仕事が終わったら、ブリガンチーナホテルの私の部屋に来てください」とYプロマネから電話がありました。急遽ロシア人のドライバーを確保し、何があったのかとホテルに急ぎました。渋滞をすり抜けながらホテルに着きましたが、車の中で今日は海運省から派遣される通訳の引き合わせだろうと薄々考えていました。

ホテルの玄関は、会社のネーム入りの制服を着用していらしたのでフリーパスです。中に入ってエレベーター前に立つと、蛇腹式のおめかしいものでしたがそれに飛び乗り5階のYプロマネの部屋に急ぎました。

私を見たプロマネは、「高島さん、急で申し訳ない。海運省から昼過ぎに話がありました。通訳が夕方にはホテルに来るそうです。60歳を過ぎた寺島さんという方です。是非一緒に会ってほしいのです。もうロビーに来ていると思うのでお連れしてもらえますか?」と急いで言われました。

全く予期していなかった日本人の通訳でした。早速ロビーに降りて探しに行きました。ロビーはただっ広く片隅の観葉植物の陰に4人掛けの小さなテーブルと椅子があるだけです。人影の少ない中、それらしき人は観葉植物の陰に隠れるようにして座っていました。小柄な人で中肉で色は黒く、古いロイド眼鏡を掛けた人でした。控えめに両膝をそろえ、その上に手の拳をきちんと乗せ、背筋を伸ばし、植物の陰に静かに座っておられました。

「寺島さんですか?」と声をかけると、

「寺島です。Yマネージャーを訪ねるよう指示されました」

「高島です。Yマネージャーがお待ちしていますのでご案内します」

「わかりました」

そうして案内しましたが、どこまでも丁寧に控えめな紳士で戦前の日本人を見る思いでした。これが通訳の寺島儀蔵氏との最初の出会いで、強烈な印象を受けました。1978年(昭和53年)のことでした。本稿の最後に「寺島儀蔵」氏について紹

介をしておきます。一定の年齢以上の方は、ご存知の方もいらっしゃるでしょうが、歴史上の人物と言っても過言ではないと思います。(続く)

### ■寺島儀蔵(1909～2001年)



北海道・根室の生まれ。戦前の共産党員で日本国内でも6年もの間監獄に入れられた。26歳の時、ロシア革命の理想を信じ樺太からソ連に入ったが、スターリン(1878～1953年)体制下のモ

スクワで逮捕され、スパイ容疑をかけられ死刑判決を受けた。すぐ25年の懲役に減刑されたが、各地の監獄(ラーゲリ)に廻され重労働を強いられた。そしてスターリン死後2年余りの1955年に釈放された。この時すでに46歳。

その後様々な苦労を重ねながらロシアで生き抜き、晩年を暮らした黒海沿岸の町、トアプセ(グラスノダール地方の港湾都市)で2001年に亡くなった。日本への望郷の念は人一倍強く、念願かなって日本に一時帰国した時は1993年、83歳の時であった。「長い旅の記録」という、樺太からソ連に入るところから書き始めた本を出版しており、これを読むと彼は誠実で気持ちの穏やかな人と思われる。決して共産主義に凝り固まったタイプではないことが伺える。どんな時でも日本人としての誇りを持ち、年を取ってからも日本語の勉強を忘れなかった。

晩年はロシアで事業する日本の会社の通訳を始め、経済的にも恵まれる様になった。ラーゲリで知り合ったウクライナ出身の女性、ナージャと知り合い、後に結婚し彼女の連れ子も育てている。彼女はちょっとしたことで17歳の時捕まり、5年もの間監獄に入れられた。厳冬の中、収容所まで歩いて行かされたことで凍傷となり手の指を3本も失った。絶望の中にいる彼女を励ましたのが儀蔵で、そのあと彼女が先に出獄し別れ別れになったが、彼の釈放後ふとしたきっかけで再会することが出来、結婚に至った。



寺島氏の著書、(右)「長い旅の記録」日本経済新聞社(1993)。(左)「続・長い旅の記録」中公新書(1996)

高鳳蓮の個展を開催するという高鳳蓮さんとの約束がいつも気にかかっていた。高鳳蓮は、北京で展覧会を開いたことがありますけれど、それは合同展覧会で、個展は未だ開いたことがありませんでした。

2004年3月、ついに開催できる機会がやって来ました。私は、長年の友人である中国科学技術大学の人文学部の教授たち数人と相談して、陝北民間剪紙展を同大学

で開催する話し合いを続けていたところ、都合よく、高鳳蓮が4月に北京へ出かけ、“無形文化遺産検討会”に出席して、終了後、途中で合肥へ立ち寄ることが出来るとの情報が入って来ました。

私は仲間たちに、高鳳蓮の展覧会開催を強力に推薦し、他の教授たちも賛成してくれたので、高鳳蓮を招いての、中国科学技術大学での展覧会と講演が実現したのです。彼女自身の希望で、彼女の娘と孫娘も同道することになり、費用一切を主催者側が負担することになりました。私は、やっと彼女との約束が果たせることになり安堵の胸をなでおろしました。

北京で開催された“無形文化遺産検討会”に出席し、終了後直ちに北京を出発した高鳳蓮の一行



中国科学技術大学博物館の展示場。これは高鳳蓮の最初の個展となった。(2004年)

3名は、2004年4月12日早朝、合肥に到着しました。初めて南方へやって来た高鳳蓮は、大学構内に咲き乱れる草花や飛び交う蝶類を目にして、「ここは良いですね。何もかもが生き生きとしていて!」と言いました。

一般の人は、この言葉に高鳳蓮の特別な思いを感じ取れないでしょうが、黄土高原に暮らしたことがある人達なら深い共感を持って受け止められる筈です。高鳳蓮が住むのは乾燥し常に水が不足している黄土高原です。冬には人々が暖房用に柴草まですっかり刈り取ってしまうので、植物の痕跡さえもが消えてしまい、僅かに乾燥に強い藜のとげとげした木が残るだけの痩せた土地。高鳳蓮はこれまでそのような土地を離れたことがありません。みずみずしく生き生きとした風景に、渴望感と同時に深い慈しみの気持ちも湧いてくるのでしょう。

中国科学技術大学付属の博物館で開催された展覧会は、これは高鳳蓮にとって、初めての個展でした。

初めての個展に高鳳蓮は気持ちが高揚し、同時に自信に満ちていました。ずらりと並んだ陝北情緒たっぷりの自身の作品を前に作品の生み



作品の前で満面笑顔の高鳳蓮



会場での創作美演

の親としての誇らしい気持ちを味わったことでしょう。これら剪紙・布堆画はまさしく彼女の子供達なのです。

中国科学技術大学が中国最高学府の一つであるなら、中国美術界最高の展覧会場は中国美術館であり、ここで展覧会を開催することは美術界の人々の憧れの的でした。中国科学技術大学での個展の後、10年が過ぎた2014年5月、高鳳蓮の一家三代はこの美術界最高の殿堂に辿り着きました。農民芸術家グループ、或いは民間芸術村落として集団が、ここで展覧会が開催した記録はありますが、陝北黄土高原の一家三人がこの美術館で展覧会を開くのは、正に前代未聞、歴史的な出来事でした。

ここで、当時の中国美術館が報道した高鳳蓮に関する、美術館5月9日の記事を紹介してみましょう。

「2014年5月8日、中国美術館および延安市人



創作美演を見る人のリクエストで剪った抓髻娃娃

民政府共同主催の、「大河之魂——高鳳蓮一家三代剪紙芸術展」が、中国美術館で開幕した。今回の展示は、「黄土積る地」「故郷への想い」「伝承」の三部からなり、高鳳蓮一家三代の華麗な作品百余点を集めて展示している。この展覧会の実施に当たり、高鳳蓮と子・孫三代は1000点にも上る剪紙の代表作品を中国美術館に寄贈し、永久収蔵されることになった。中国の民間芸術資料として貴重なもので、真に奇特な行為である。これはまた、文化部・財政部が2002年に立案し、2004年から正式に始動を始めた「20世紀国家美術収蔵と寄贈奨励特別計画」が実施されて以来、中国美術館が取得した一群の貴重な民間美術収蔵品である」

中国美術館の範迪安館長は、高鳳蓮・劉潔瓊・樊蓉蓉の三人に感謝状を贈りました。



中国美術館の正面玄関



中国美術館館長より感謝状を授与された高鳳蓮、劉潔瓊(娘)、樊蓉蓉(孫)

返礼に、三人は開会式式典の中で、普段通りに陝北民歌を口ずさみながらの剪紙制作を披露しましたが、これは、式典に参加した人々を魅了し、絶賛を博しました。

高鳳蓮の剪紙造形には独特の風格があり、人並外れた制作意欲を持ち、学者や専門家それに娘たちの協力と援助を受けて、彼女は中国伝統文化である剪紙の分野をリードする存在となり、十年來全国の剪紙展覧会において最高賞を総嘗めにしました。

高鳳蓮は、数々の受賞・表彰にはあまり関心を示していませんが、唯一つ、2012年に中国芸術研究院が国家文化部を代表して授与した“国家級無形文化遺産の代表的伝承者”の記章だけは非常に大切に思い、私が写真を取らせてもらう時も慎重に扱っていました。確かにこれは最高の栄誉であり、高鳳蓮が一生を剪紙に捧げ、陝北の剪紙芸術を高みに押し上げたご褒美なのです。

ここ数年来、中央テレビ・北京テレビ・上海テレビ・遼寧テレビ・陝西テレビ・延安テレビ等多くのメディアが相前後して、彼女に関するドキュメンタリー、作品紹介などの特集を組んで話題を提供しています。

## 高鳳蓮の展覧と受賞の略歴

年度	受賞・展示の内容
1989年	第一回延安地区テレビ剪紙コンテストで一等賞受賞。
1995年	北京で開催の第四回世界婦人大会期間中に、中央美術学院陳列館への出展要請があり、多くの剪紙・布堆画が当該館に収蔵される。
1996年	多数の布堆画が、中国美術館に収蔵される。
2000年	北京で中国美術館が主催した《中国剪紙世紀回顧展》にて特賞を受賞。当該作品が中国美術館に収蔵される。
2001年	山東省威海市主催の《中国民俗情緒剪紙大展覧会》で、高鳳蓮の大作剪紙《黄河河畔の人々》が金賞受賞の栄に浴す。
2002年	北京の革命博物館主催《華夏(古代中国)風情剪紙芸術展》にて金賞受賞。
2004年	4月、高鳳蓮のプロフィールと代表作が、中央美術学院と国連ユネスコ主催の“母なる大河を行く”——中国民間剪紙天才伝承者の生活と芸術大展覧会—で入選、ユネスコの賞賛を受ける。同月、彼女のプロフィールと代表作品が、中央美術学院の無形文化遺産研究中心の《中国無形文化遺産天才伝承者データベース》に登録された。
2005年	陝西省民間美術館が主催する《黄土のルーツを訊ねる—2005陝西美術作品展》において、一等賞を受賞、同時に“民間芸術大家”の称号を獲得する。
	高鳳蓮の剪紙芸術が、独特の表現と風格を持ち、現在の中国民間芸術界の中で特別な雰囲気醸成を醸成していることに鑑みて、中国芸術研究院は、高鳳蓮を“中国芸術研究院民間芸術研究員”に特別招聘した。 剪紙作品『オリンピック歓迎剪紙』が金賞を受賞。



晴れがましい称号に得意満面の高鳳蓮

文化部が授与したメダル(中国の「部」は日本の「省」に当たる)

2017年は‘わんりい’にとって記念すべき年であった。8月に創立25周年を迎える年の春、長年に亘る日中友好活動への貢献が評価され、日中学院創設者である倉石武四郎先生を記念する倉石賞受賞の栄に浴した。この二重の喜びを形にしたいと話し合いを重ねた結果、中国文化センターのご協力を得て「果てしなく広がる黄色い大地の華 陝北剪紙」展を開催することが決定した。

会期は5月14日から18日で、中国文化センター(虎ノ門)を会場にして600点を超える陝北剪紙作品を展示した。展示準備では会のメンバー多数が額の設置に協力くださったが、慣れない仕事で開幕準備はかなり手間取り、中国文化センターの職員の方に心配をお掛けした上、手助けを頂いて何とか間に合わせる事が出来た。ざっと催しを振り返ってみたい。

◆14日(初日)3時から開幕のイベントとして、**銭騰浩さんの笙と曹雪晶さんの二胡演奏**。続いて、日中学院・学院長の片寄浩紀先生と中国文化センターの石永菁センター長ご臨席で展覧会が開幕した。

### 【プログラム】

#### 1)寺西俊英代表による当会の歴史と活動内容紹介

#### 2)片寄日中学院学院長の御祝辞

祝辞の中で先生が初めて中国を訪問された折にお土産に剪紙を買われたとのお話もあり、中国の民間に伝わる文化代表として剪紙の存在が大きいことを改めて感じた。

#### 3)田井光枝前代表による展示剪紙の見どころ紹介

今回展示の剪紙は、①全て鋏で剪られたもの、②収集当時、他地域との関わりが少なかった陝北黄土高原地帯の厳しい生活環境を生き抜くための祈りの剪紙作品であること、③現地の生活が変わり今はスタイルが変わってきて、現地の民間芸術として節目にある頃の作品である。

#### 4)古参会員・木村武司さんの音頭で乾杯

乾杯のビールは青島ビールを用意。棗やサンザシ

等の干菓子等が並んでさやかに開幕を祝う。

#### 5)お楽しみビンゴ

◆15日:

#### 1)講演会「中国の剪紙～黄河の西と東～」

(講師: 首都大学非常勤講師・三山陵博士)

当展覧会・展示作

品の故郷である黄河

西の陝西省(鋏使用)

と黄河東の河北省蔚<sup>うゑ</sup>県の剪紙(刻刀使用)を対比して紹介。中国剪紙が地方によって異なることを知ることができた。

#### 2) 版画家・写真家であり安徽財形大学元教授の周路氏から拝借した剪紙収集当時の「陝北黄土高原・暮らしと人々」写真をスライド上映

◆16日: ‘わんりい’としてのイベントなし

◆17日: 映画「黄色い大地」(監督: 陳凱歌<sup>チェンカイコー</sup>/ 撮影: 張一勇<sup>チャンイーモウ</sup> 藝媒) 上映。映画だけで50名以上の参加があり、それぞれ陝北剪紙の故郷に思いを寄せて頂けたと思う。

◆最終日18日は午前中だけの展示だったが、開場同時に来場の方や終了後に来場の方がおり、短い時間にも拘らず来場者30名に達した。

会場に置いたアンケートでは、多くの方が展示品の数の多さに驚き、同時に作品のパワーを強く感じておられた。黄土高原での生活の様子をもっと知りたいとの回答もあり、また、人間はどんな厳しい環境にいても美しいものを生み出す力があることに感動したとの回答もあり、今回の催しの意義を知って嬉しく思った。都心での活動は何かと大変ではあったが、来場者の感想に励まされ、最終日には会期の短さが残念なように思えた。

最後に、中国文化センターの職員の皆様のご協力を深く感謝申し上げます。

(報告: ‘わんりい’事務局)



日中学院院長による祝辞



開幕を待つばかりの舞台



会場入り口正面に掲げられた  
山田美智子さんの書による看板



銭騰浩さん（中国笙）と曹雪晶さん（二胡）  
演奏による開幕イベント



◀ 代表・寺西俊英さんの挨拶



ビンゴや語り合ったりとオープニングパーティが続く



中国小物が当たるお楽しみビンゴでワクワク



三山陵先生の講演は満席（80名）を超えた（5月15日）



陝北剪紙満載の額がずらりと並んだ会場風景

【記念展参加者数】

5月	入場者	参考
14日	76名('わんりい'スタッフメンバー15名を含む)	15:00から
15日	94名	
16日	31名	
17日	95名	
18日	30名	13:00迄
合計	326名	

【アンケート回収枚数 60枚】

評価：予想以上に良かった …46枚  
 予想通り良かった…………… 11枚  
 まあまあ …………… 0枚  
 無回答 …………… 3枚

【アンケート記載のコメント】

- 圧倒されます。これだけの数をよく収集されましたね。はさみ1本で細かな部分まで切り取る技は人間のすごさを感じました。美しい!! 会場設定素晴らしかった。ご準備お疲れ様でした。(60代)
- なかなか見る機会がないものなので貴重です。とても興味深かったです。(60代女性)
- 素晴らしい剪紙を見せて頂きました。技術だけではなくその心が一枚一枚に表れているように感じました。感謝しています。(70代以上)
- 剪紙のけいけんは双喜だけです。素晴らしいの一言です。有難うございました。ご活躍を!(70代以上女性)
- どの場所でも、どんなに大変な土地や生活でも美しく生きることができるんですね。(60代)
- もっと話を聞きたい。剪紙は「匠人」と呼ぶのでしょうか。あるいは技能者というのでしょうか。歴史を知りたい。(70代以上男性)
- 剪紙はもとより、せん北の人々の生活、環境が分り大変良かった。私は引き揚げ者のひとりですがせん北方面は知らないし知りませんでしたので。
- 17日の朝刊で知りました。もっと早く知っていたら音楽の演奏も聴けたのに残念です。(60代)
- 素晴らしい作品に感激しました。世界は広いとつくづく思いました。(70代男性)
- 生活の中から生まれた二つとないものであり、はさみを動かしている人の思いが感じられた。作品展を



- 開催して下さった方々に感謝します。(60代女性)
- 2月の新年の「エト」もよかったが今回もよかった。催しがあったらまた来たいと思います。(70代以上)
- よかった。私が生まれた時に近い中国を見せて貰った。(70代以上)
- すべての人や動物の表情がとても豊かで感動しました。(20代女性)
- 制作の様子がビデオでもう少し詳しく見られるとよかった。(50代女性)
- 中国の大都市の近代化された部分ばかり目にするが多かったのも、このような地域があることを恥ずかしながら忘れていました。作品の器用さにびっくりし、人びとの温かさを感じました。(40代女性)
- 大らかで力強く明るい。イメージの豊かさ、自由さに圧倒される。80年代初めに留学し北京で3年間暮らしました。農村にも宿泊してスケッチをしました。今日はまた素晴らしい作品を拝見でき、力と清らかな心情を受け取りました。有難うございました。(50代女性)
- 剪紙もよかったがお話しが後を引くようで面白かったです。3月西安に行き切り紙も入手してきました

が又行ってみたい。(70代以上 男性)

- 切り絵は中国の伝統作品と見てきましたが、このように地域によって歴史によって異なり奥深いものとは知りませんでした。細かい作品が歴史(伝統)と高度な技術の習得によってより芸術的な作品が生まれていることを知ることができました。祈りの作品から絵画的なものまで時代によって変化していることも当然と思いつつも面白く思いました。(お土産まで)有難うございました。切り絵にとって神の重要性を感じますがどのように手に入れたのか知りたかったです。(70代以上 女性)
- 中国は広すぎてあまり分りませんでした。とてもよかったです。
- お世話になり有難うございます。剪紙の変遷、地方の特色など興味深くお話を伺い展示を楽しませて頂きました。
- 剪紙を実際に見たりやったりしたかったが、お話は興味深かったので大変感謝しています。(30代男性)
- 昔、中華街で購入したことがあり懐かしく来てみました。(40代 女性)
- 剪紙は日本とは違う力強さと厳しさを感じた。(70代以上)
- どの作品を見てもため息の出るものばかりで、作る人の手先を見てみたいです。作品にホッとしますね。(70代以上)
- 剪紙の作品の美しさに感動しました。ビデオで作品を鋏で切るシーンを見て、下絵もなく、頭の中に描いたものを次から次へと仕上げていく様子にも驚きました。じっくり作品を見ることができてとてもよかったです。ありがとうございました。(60代 女性)
- わんりいの歴史がよく分りました。ひとつづついねいに取り組んでこられたこと、素晴らしいです。今後の活動に期待しています。(60代 女性)
- 驚くべき技術力の高さと芸術性に魅了されながら見入りました。改めて中華大陸の文化の素晴らしいさを実感しました。薄くて丈夫ではない素材であるにもかかわらず何十点にもわたって披露して下さった持ち主の方と主催者に感謝申し上げます。中国は素晴らしい大国です。さらに中国が好きになりました。ありがとうございました。(40代 男性)

(原文のまま記載)

## 記念展展示作品リスト

NO.		額サイズ (mm)	題名	作者名	剪紙数
1	1	854 × 1634	展覧会看板	山田美智子	16
2	1	850 × 1065	高鳳蓮作品集 1	高鳳蓮	10
3	2		高鳳蓮作品集 2	高鳳蓮	7
4	3		韓菊香作品集 1	韓菊香	10
5	4		陝北剪紙集 1	陝北女性たち	17
6	5		陝北剪紙集 2	侯雪昭 楊梅英	23
7	6		ヤンガーは楽しい	韓菊香	33
8	7		豊かさへの祈り	侯雪昭・他	17
9	8		窗花集 1	楊梅英	33
10	1	920 × 715	家族 1	高鳳蓮	11
11	2		家族 2	高鳳蓮	12
12	3		家族 3	高鳳蓮	12
13	4		家族 4	高鳳蓮	9
14	5		高鳳蓮作品集 3	高鳳蓮	15
15	6		干支の動物たち 1	高鳳蓮	14
16	7		干支の動物たち 2	高鳳蓮	9
17	8		干支の動物たち 3	高鳳蓮	15
18	9		干支の動物たち 4	高鳳蓮	18
19	10	920 × 715	ジュウジーワーワ 1	韓菊香	9
20	11		ジュウジーワーワ 2	韓菊香	20
21	12		ジュウジーワーワ 3	韓菊香	24
22	13		ジュウジーワーワ・他	韓菊香	17
23	14		虎いろいろ	韓菊香	18
24	15		虎・他	韓菊香	16
25	1	610 × 854	踊りや踊れ	楊梅英	26
26	2		陝北農家の暮らし	陝北女性たち	24
27	3		喜花	韓菊香	8
28	4	854 × 610	陝北の暮らし	程東梅	4
29	5		ジュウジーワーワ 1	韓菊香	2
30	6		ジュウジーワーワ 2	韓菊香	2
31	7		ジュウジーワーワ 3	韓菊香	2
32	8		ジュウジーワーワ 4	韓菊香	2
33	9		ジュウジーワーワ 5	韓菊香	2
34	10		ジュウジーワーワ 6	韓菊香	5
35	1	780 × 1060	鶏	劉曉娟	19
36	2		双喜集	高鳳蓮 韓菊香 侯雪昭	7
37	3		団花&干支	侯雪昭	13
38	1	854 × 834	牧童と馬	高鳳蓮	11
39	2		団花 1	侯雪昭	1
40	3		団花 2	侯雪昭	1
41	4		団花 3	侯雪昭	1
42	5		陝北の暮らし	侯雪昭	10
43	6		陝北の暮らし	高秀芳	12
44	7		十二支	高秀芳	12
45	8		無題	劉曉娟	10
46	1	495 × 610	ジュウジーワーワ	劉曉娟	1
47	2	610 × 495	鶏	韓菊香	1
48	3		虎と鶏	韓菊香	1
49	4		方形切り紙	高鳳蓮	1
50	5		飾り絵と剪紙①	韓菊香	12
51	6		飾り絵と剪紙②	韓菊香	12
52	7		飾り絵と剪紙③	韓菊香	12
53	8		豊穰への祈り	侯雪昭	5
54	2	900 × 1800	大剪紙	高鳳蓮	2
55	1	60x70	窗花集	楊梅英	9
56/57	2	435x360	窗花 / 写真		0
58	3	854 × 610	陝北地図	佐々木健之	0
59	4	610 × 854	周路メッセージ	周路	0
60~72	13	550 × 450	周路・陝北地方の 写真 13 枚		0

※額中剪紙615点、額なし剪紙 2点。額数(写真含) 72枚

※ジュウジーワーワ(抓髻娃娃): 子どもの姿をした陝北地方の護神

## ‘わんりい’記念展、無事終了しました ご協力を心からお礼を申し上げます

当記念展は‘わんりい’としては日頃の活動フィールドを離れての、初めての都心での活動でした。会の皆様にとってはかなり遠方ですので足を運んでいただけるとかどうかなどの心配もありました。展覧会を企画・開催するのは難しい事ではありません。が、自信と誇りを持って紹介できる展示であっても、催しの存在を知って会場に足を運んで頂くという課題があります。

今回は、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞の他、‘わんりい’のこれまでの活動に関わりある陽光導報、レコードチャイナ、新華社のお力添えを頂けたこと、また、‘わんりい’メンバーや関係の皆様が会場に足を運んでくださったばかりでなく、ご自分が関わる活動や施設などでチラシ配布下さったり、送付くださったりなど一丸となつてのサポートも大きな力でした。

それら各方面のお力添えによって、会期5日間で来場者300人を超す盛会になり、活動25周年、倉石賞受賞の記念展にふさわしい催しになったことを報告できて喜んでおります。また中国僻地の、当時解放されたばかりでそれまで独自の文化と生活の中で生きてきた地域の女性たちの剪紙作品の素晴らしさを予想以上の多数の方に知って感動頂けたことも展覧会の成果になりました。久々に太陽の光を見ることができた陝北剪紙もどんなにか喜んだことかと思ひます。

中国文化センターの会場は、予想外に広く、850mm x 1065mmという大きな額でも普通サイズ程度にしか見えません。壁の長さ合わせた額数

は、70枚を超え、展示剪紙作品は大小合せて600枚を超えました。実際、多くの協力がなければ開催できない大きな展覧会となりました。充実して終了できたのは‘わんりい’メンバーたちの、日頃からの協力を惜しまないボランティア精神があればこそでしょう。

と同時に、広い会場と備品の額を無償で提供下さった上、PR効果満点の素晴らしいチラシデザインを作成下さった中国文化センターの協力へお礼を申し上げたいと思います。‘わんりい’は25年に亘る活動の数々でも常に各方面の温かな支援に恵まれて来ており本当に幸せな会だと感じます。

最後に、陝北地方の広大な風景や民間芸術にほれ込み、30年間という人生の大半を現地と関わり続けた木版画家・写真家である安徽財経大学元教授・周路先生の応援もお伝えします。先生が撮りためた写真を惜しげなく提供下さった他、ご自身が収集した剪紙作家三名(高鳳蓮、韓菊香、楊梅英)の窗花(窓花)のコレクションをお貸し下さった事により一層充実した展示内容になりました。剪紙展でありながら現地の人々や生活も皆さんに知って頂けたのは何よりでした。陝北をテーマに素晴らしい版画作品を多数制作されておりいつか展示される機会があるとよいですね。

展示作品を収納しながら、厳しい労働に明け暮れる日々にも負けることなく、明るく逞しく命を繋いできた現地の人々の笑顔、そして黄土の大地を割ってうねるように湾曲しつつ悠々と流れる黄河を懐かしく思い浮かべています。



(田井光枝)

### 《‘わんりい’掲示板》

#### 第28回 インターナショナル・オルガン・フェスティバル・イン・ジャパン <http://www.saegusa-s.co.jp/con180620-22.htm>

オーストリア・ウィーンシュテファン大聖堂 主任オルガニスト エアnst・ヴァリー 来日公演!

- 6月20日(水)東京カテドラル関口教会聖マリア大聖堂  
19:00開演(18:30開場) 5000円  
全席自由
- 6月22日神奈川県民ホール(小ホール)  
18:30開演(18:00開場) 3000円  
\*‘わんりい’会員の参加費は  
20%引きになります。
- ◆ 問合せ: ☎044-981-6171(山田賀世)



- ERNST WALLY (エアnst・ヴァリー)  
1976年ウィーン生まれ。ウィーン音楽大学卒業後、教会音楽や音楽教育を研究し、世界中で知られている教会・シュテファン大聖堂典礼オルガニストとして任命される。ウィーン放送交響楽団、ヴィエナ・シンフォニーオーケストラ、ウィーン・トーンクンストラ管弦楽団などコンサートオルガニストとして活発に国際的演奏活動を行う。

## シルクの記憶—中国ファッション30年の歩み展

参加無料

- **場所**：中国文化センター 港区虎ノ門3-5-1 37森ビル1F  
日比谷線「神谷町」駅4a番出口より徒歩5分/銀座線「虎ノ門」駅2番出口より徒歩7分
- **会期**：6月6日(水)～6月15日(金)10:30～17:30 (初日15:00から、最終日は13:00まで/土日休み)

中国のトップデザイナーの手による全国規模のコンテストで受賞した作品30点あまりを展示し、この30年間の中国ファッション界の飛躍振りを見ることが出来る。剪纸(中国の切り紙工芸)や刺繍細工・手織り・染物の技術といった伝統的な民間芸術の技法を現代のファッションに融合させ、文化芸術方面で追及した美的観念を表現。クラシカルであると同時にモダンでもある、中国ファッションの作品群を楽しめる。開幕式ではファッションショーも行います。

▲開幕式(ファッションショー)6月6日(水)、15:00～

- **申込み**：中国文化センターのイベントサイト<https://www.ccctok.com/event/>からお申込み下さい。  
電話の場合⇒ ☎03-6402-8168
- **主催**：中外文化交流中心、中国文化センター、中国对外文化集团公司



## 【中国文化センターの催し】 中国戯曲 シリーズ講座 (講演言語日本語)

360を超える数多くの地方伝統演劇があり、1万以上の演目があるといわれている中国戯曲を知ろう

- **第6回** 昆劇の魅力を、現役の昆劇俳優が語る 世界無形文化遺産 中国昆劇を知る  
講師：陸海栄 7月11日(水) 15:00～16:30

◆申込みは中国文化センターHP「イベント案内ページ」<https://www.ccctok.com/event> から



### キルギス映画「馬を放つ」(89分)

～昔々、馬は人の翼だった～

[http://www.bitters.co.jp/uma\\_hanatsu/](http://www.bitters.co.jp/uma_hanatsu/)

シルクロードの要所として栄えた地で映し出される、郷愁的な映像美。(監督・アクタン・アリム・クバト)

- **川崎市アートセンター新百合映像館**(新百合北口徒歩5分)  
6月2日(土)～8日(金)(月曜休館) 10:00～  
6月9日(土)～15日(金)(月曜休館) 18:00～

映画の舞台は、標高5000mを越える天山山脈のふもとに広がる山岳と草原の国キルギス。自然光で撮影された映像は郷愁的で、観る者の心を揺さぶる。流れる時のなか、失われゆく“馬”と“人”との絆が甦る時、美しく幻想的な物語が生まれる。



### 初心者体験のお誘い【鶴川水墨画教室】

- 講師：満柏(日中水墨協会・会長)
- 会場：鶴川市民センター  
(195-0062 町田市大蔵町1981-4 駐車場有り)
- 第2又は第4月曜日 14:00～16:00
- 体験参加費：1000円  
(見学無料/手ぶら参加可)
- ◆ 問合せ：☎042-735-6135(野島)



### ◆わんりいの催し ボイス・トレをして日本の歌を美しく!

あなたも私も笑顔が美しくなる! 身体の力を抜いて、気持ちよく発声しよう!!

- 6月12日(火) 10:00～11:30
- 7月31日(火) まちだ中央公民館・視聴覚室

★動きやすい服装でご参加ください

- 講師：Emme(歌手)
- 会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- 定員：15名(原則として)

◆申込み：☎042-735-7187(鈴木)

E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp(わんりい)



### ◆わんりいの講座 中国語で読む・漢詩の会

漢詩で磨く中国語の発音! 中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう!!

▲まちだ中央公民館 10:00～11:30

6月24日(日) 第3・第4学習室

7月29日(日) 第3・第4学習室

▲講師：植田渥雄先生

(桜美林大学名誉教授、  
現桜美林大学孔子学院講師)

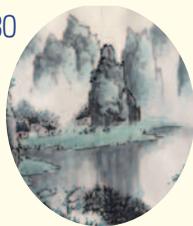
▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)

▲定員：20名(原則として)

\*録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆申込み：☎090-1425-0472(寺西)

E-mail:ukiuki65@yahoo.co.jp(有為楠)



### 【'わんりい'の原稿を募集しています】

'わんりい'は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまわられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話、これらと思うイベント情報などを気軽にお寄せ下さい。

日中文化交流市民サークル'わんりい'

参加無料

### 青花・永遠の美 景德鎮明清官窯復刻展「宮廷のコバルトブルー」

- 場所：日中友好会館・美術館 〒112-0004 東京都文京区後楽1-5-3後楽国際ビル1F ☎03-3815-5085
- 会期：6月20日～7月12日(月曜日・休館)10:00～17:00(6月20日15:00開幕式&内覧会 6月22日は20時まで開館)

1700余年の陶磁器生産の歴史を誇る都、景德鎮。磁器を英語で「チャイナ」と呼ぶように、宋、元、明、清といった時代に花開いた名品は、今もなお、世界で愛されている。中国磁器の発展には、宮廷、官用の御用器の専用工房である官窯の存在があったといわれ、特に、明清時代にはそれぞれ御器廠、御窯廠といわれる官窯で優れた匠の技術と素材の贅を極めた名品が数多く生み出された。明清時代の作品を古の技法に忠実に一点一点、手作業で復刻し、現代に甦った景德鎮明清磁器およそ100点を紹介。



【会期中のイベント】※参加希望の方は☎又はメールで日中友好会館にお申し込みください。



☎03-3815-5085 メール：bunka@jcfj.jp

- ◆6月22日(金) 18:00～  
講演会「イスラムが魅せられた景德鎮の青い花」  
講師：東京芸大特任教授・井上隆史
- ◆6月27日(水) 11:00～ 二胡演奏会 演奏：ウェイウェイ・ウー
- ◆7月7日(土) 11:00～ 古筝演奏会 演奏：王敏

【主催】(公財)日中友好会館/景德鎮市人民政府

- 同時開催「景德鎮新鋭時期作品展」中国文化センター虎ノ門 詳細問合せ：中国文化センター ☎03-6402-8168  
6月19日(火)～29日(金)(初日は15:00～、最終日は13:00まで)

**使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!** 日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。各位からたくさんのお手紙をお届け頂き感謝申し上げます。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、おついでに折に田井にお渡し下さい。

‘わりい’は、新入会をいつでも歓迎しています。年度途中に入会の方には会費の割引があります。気楽にお問い合わせください。

年会費：1500円 入会金なし

‘わりい’振替口座(郵便局)00180-5-134011

‘わりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。

①年10回(2月・8月を除く)おたよりをお送りします。

②‘わりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ：044-986-4195(寺西)

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わりい’をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。

◆町田市民フォーラム4F・町田国際交流センター、町田生涯学習センター6F、中国文化センター、川崎市国際交流センター、神奈川県立地球市民かながわプラザ・他でご自由に取り頂けます。上記へお問い合わせください。

### ‘わりい’234号の主な目次

- 「寺子屋・四字成語」(13)坐井観天 ……………2
- 論語断片(37)「郷原は徳の賊なり」……………3
- 天府の国・四川省(4) 李庄古鎮から五粮液工場と竹海へ…4
- 混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義(24)…6
- 東西文明の比較(25)海を渡った人々……………8
- 中国の笑い話(36)……………10
- 樹木・花にまつわる物語⑤ネムノキ 合歡の木 ……11
- 海外出張の思い出・旧ソ連⑤……………12
- 黄土高原に咲く目にも彩なる花々 X……………15
- 活動25周年&倉石賞受賞記念展・報告……………18
- 記念展・アンケート集計とコメント等……………20
- 記念展、協力ありがとうございました……………22
- ‘わりい’掲示板……………22・23・24

### 【6月定例会開催日及び7月号‘わりい’発送予定】 ◆ 問合せ：☎044-986-4195(わりい)

- 定例会：6月6日(水)13:30～ 三輪センター・第三会議室 \*定例会は‘わりい’会員の皆さんはどなたでも参加できます。
- 6月号‘わりい’発送日6月29日(金)10:30～ 三輪センター：第二・三会議室 \*おたより発送日は弁当持参です